

4 上手な登校刺激の与え方

登校への促しは、児童生徒の状況や不登校となった要因・背景等を適切に把握した上で行うことが大切です。不登校の背景には様々な要因がありますから、どのような不登校であっても、全て登校を促す、あるいは促さない等の画一的な対応はよくありません。また、直接的に登校を促さない状況にある場合であっても、あきらめずに児童生徒と関わりをもととする姿勢をもつことが大切です。

(不登校問題に関する調査研究協力者会議報告書 平成15年6月)



まず、児童生徒との信頼関係を築くことが大切です。児童生徒と遊んだり雑談をしたりすることが、思わぬ効果を発揮します。

3つのポイント

1 小出しにする

できるだけ小さな話題から順番に提示する。いきなり「明日から登校するかどうか決めなさい」というような大きな問題を突きつけると、子どもは混乱するばかりです。まずは、例えば「学校の門のところに紫陽花が咲いたよ」とか、「今日は大掃除があつてね」など、あまり核心に迫らない話題をそっと出して、本人の様子を見るところから始めたほうがよいでしょう。そのような話題にあまり抵抗がないようであれば、少し進めて「そろそろ中間試験も近いのだけれど…」などと言って、様子を見ながら次に進むというようにすると、本人を傷つけたり追いつめたりすることも少ないといえます。

2 反応を見て、柔軟に変える

登校刺激が有効であるかどうかは、その時の反応によって判断しなければなりません。「今度校外学習があるんだけど」と言ったとき、子どもが「ふうん」とか「行くかどうかわからない」などの反応をすれば、まずは大丈夫でしょう。「じゃあ、無理に行かなくてもいいけれど、班のメンバーに入れておくからね」など、次の段階に進みます。

しかし、突然暗い顔になったり、ずっとその場から立って自分の部屋に行ってしまったりしたときは、まだその話題は早すぎるということです。そう感じたら「あっ、ごめん。その話はやめようね」と、さっさと切り上げることです。そうすれば心の傷を深めることはありません。

3 効果については翌日確かめる

登校刺激になるような話題を持ち出したときは、たとえその時に調子が良さそうでも結果を確かめておくことが必要です。次の日に家庭に電話をして、保護者に前日の様子を聞きます。特別に不機嫌でもなく、普通に過ごせていれば成功といえます。しかし、家庭訪問の後、周囲に当たったり暴れたりしていたら、刺激が強すぎたといえます。数日から1週間はそっとして様子を見て、登校刺激の内容を考え直す必要があるかもしれません。それから再度試みるということになります。しかし、1回反応が悪かったからといって、何日も何週間もそのままにしておくことは好ましくありません。

(平成20年度きのくに子ども自立支援フォーラム 小澤美代子教授の講演資料より)